



大木神父(イエズス会)は昨春帰国した

一九七七年、まだ宣教活動が禁じられていたネパールに単身渡ったイエズス会の大木章次郎神父(84)は、同国第二の都市ボカラに障がい児訓練センターを開設。センターを通して人々とかかわり、国の民主化を見守りながら宣教に尽くしてきた。赴任当時ゼロだったボカラの信者数は百五十人まで増えた。昨春、帰国した大木神父は、召命への確信を求めていた特攻隊時代や、宣教のためにネパールで尋問に呼ばれた時のことなどを振り返り、「すべて、み摂理」だったと喜びをもって語る。

元特攻隊員 — 信者0人の地へ ネパール宣教の大木章次郎神父

会の姉妹校で教えた。ところが、帰国準備を始めたころにボカラでの障がい児の訓練施設建設の要請があり、「神のみ旨だと直感して」引き受けることになる。

尋問に呼び出され

ボカラで一人、民家を借りて障がい児の受け入れを始めた。会の方針で宣教はせず、施設の傍らでミサをささげていたが、人々とかかわるうちに、キリスト教に興味を持つ人も現れ、聖書の勉強なども始まった。

ところが八三年ごろ、大木神父の活動に宣教活動の疑いがあるとの投書が新聞に掲載され、役所へ尋問に呼び出される。

「宣教をしていると言えば投獄が強制送還か。していないと言えば、キリストに対する裏切りになる」。どう答えるべきか思案したが、祈りの中、必要な答えは聖霊が示してくれると福音書のイエスが語っていたことを思い出す。「道は示される」と確信して出頭した。すると役人は、宣教活動の有無に言及する前に、たまたまその場にいた近所の人たちに大木神父について尋ね出したのだ。人々は、障がい児の指導をはじめ、当時一年間に三千人の病人、けが人を世話していた大木神父の働きを証言。役人は仕事を続けるよう大木神父を励まし、帰宅させたという。

三十年間、多くの出会いがあった。就学費用を支援した子どもは「人のために役に立つ人生を送りたい」と語ってくれた。教区司祭が一人、修道女が六人誕生した。名指しで殺害を予告する電話を受けた時期もあるが、折に触れて道が示されてきた実感がある。

「(戦争で)死ぬなら、司祭が道ではないというしるし。特攻隊は召命を確かめる手段で、賭け。命懸けで祈るような心で応募しました」。配属先は人間魚雷「回天」特攻隊。敵艦への体当たり訓練などに励み、上官からは「貴様らの人生はあと四カ月! 三カ月!」と、宣告される日々だった。

「あと三カ月!」の時に終戦。召命の道を確認するが、家族は「あなたのようなワルが!」と猛反対。振り切って入会すると、「召し出しを支えるため」に六人いた姉妹全員が修道女になった。全部、み摂理

定員二十人の訓練センターは人気で、入所希望者は常に四十から六十人待ちの状態。夢だった新校舎が昨春秋に竣工した。新校舎には、職業訓練室やコンピューター室のほか、体操や各種遊びのできるホールも設置。広くなったため、毎日のぞうきん掛けが大変だと伝え聞く。かつてぞうきん掛けを指導した大木神父は、目を細めてこう語る。「(同国では)掃除は卑しい身分の仕事。親の反対で指導が大変でしたよ」

ゼロだったボカラの信者は百五十人に増え、ネパールの教会は使徒座代理区になるまで成長している。しかし、ボカラで計画が始まった新聖堂の完成はこれからのこと。道半ばとの思いも残るが、祈りや出会いの中で導かれてきたことを思い、「神様が司祭としての自分を使っているということが分かる。全部、み摂理」であることの喜びを感じていると話す。

仕方なく行ったネパールでの仕事が「こんなに長くなるとは」。与えられた道の不思議について大木神父はこう話す。東京・上智大学で哲学科を修了後、神戸の六甲学院や栄光学園(神奈川県)などで教えた。生徒たちに「ネパールなど(の海外)でも弱い人のために働くよう」伝えていたところ、後に同国のイエズス会から現地に招かれる。「しまった、と思います。(生徒たちの手前)無視は許されないと」

二年任期でネパールの首都カトマンズにある同



エベレストを背にミサをささげた後で(大木神父は後列右から2人目)